
緋弾のエリア～神殺し伝説～

珍獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜神殺し伝説〜

【Nコード】

N1430Y

【作者名】

珍獣

【あらすじ】

世界でもトップクラスの特特殊部隊、米軍・第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊、通称デルタフォースに14歳で入隊した米軍少佐の毒島ぶすしま金助きんすけ。

そんな金助は、更に諜報を得意とするSランクの凄腕武偵でもあった。

軍の上司でもある父に勧められて4月から従兄の住む日本の武偵高に転校することになった金助。

だが、日本で出会った仮面を付けた謎の男に渡された刀『神殺し』

を手にしたことで、色金を巡る争いに巻き込まれていく……!!

プロローグ〈再会〉（前書き）

先に言っておきますが、私には文才というものはありません!!
ひどいことになってるかもしれないませんが、温かい目で読んでいた
だけたら幸いです。

プロローグ〜再会〜

武偵。それは日々凶悪化する犯罪に対抗するために作られた国家資格で、武装探偵の略称である。

武偵は武装を許可されて、武偵法の許す範囲内においてありとあらゆる仕事を請け負う、いわゆる便利屋である。

レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロメートル・東西500メートルの人工浮島、通称学園島。

元は空港滑走路として使われる予定だったこの島に、武偵の教育機関である東京武偵高は存在する。

その武偵高の施設の周りを俺は歩いていて。

若干短めの黒髪に、それなりに整った顔立ち、185センチの長身、武偵高の制服を着ている。

俺―毒島ぶいすじま 金助きんすけは、教務科マスターズで転校の最終手続きを終え、敷地内を散歩していた。

自慢だが、俺は米陸軍特殊部隊のデルタフォースの最年少隊員であり、階級は少佐だ。

なぜそんな俺が東京武偵高にいるのかというと、父親であり、尚且つデルタフォースの司令官である毒島ぶいすじま 金正かねただに「日本の優秀な武偵の中で、自分を磨くように」という指示を受けたのと、従兄がこの学校にいるからだ。

俺は周りの施設を見回した。

『アメリカの基地程では無いが、なかなかの施設が揃ってるな。』

俺は更に歩を進め、気がつけば第2グラウンドの横に来ていた。

『ここがグラウンドか。広さはまあまあかな？』

そう言いながら歩きながらグラウンドの広さを確認していると、グラウンドの入口からかなりのスピードで何かが入っていくのが見えた。

『自転車・・・なんであんなに速度だしてるんだ？駐輪場はあっちじゃなかったはずだし・・・』

自転車の行き先を考えていると、後ろから少女がパラグライダーで低空飛行しながら追いかけて行った。

『・・・新手の鬼ごっこかな？』

そう呑気な事を考えていたらパラグライダーの少女が自転車の先に回り込み、掴まるところに足を引っ掛けて逆さづりになり、自転車に乗った奴にぶつかって自転車に乗っていた奴はパラグライダーの少女に抱きつく形で自転車から持ち上げられた。

その直後、乗り主をなくした自転車は徐々に速度を落として一爆発した。

パラグライダーと自転車の二人は、今の爆風で体育倉庫の中に転がって行った。

『マジかよ・・・!!』

訓練で何度も使用したから分かるが、爆発の音・威力・爆発の仕方等の情報から察するに今の爆発はC4爆弾が使われていたということとが俺には分かった。

しかも、自動車くらいなら余裕で吹き飛ばせるほどの量を。

『とにかく体育倉庫に向うか』
ひとつ飛びでフェンスを乗り越えて、体育倉庫に向かって走り出した。

だが、それは背後からの銃撃に止められた。

弾が跳んできた方を見ると、そこにはスピーカーとイスラエルのIMI社の傑作銃のUZIが取り付けられた、セグウェイが10台止まっていた。

『なんでセグウェイなんかUZIが付いてるんだよ!!』
俺は近くの太い木の陰に隠れた。

セグウェイは、3台だけ残して残りの7台は体育倉庫の方に向かって行った。

『一体どうなってやがるんだよ……!!』

キレ気味の声でそう言いながら、右脇のショルダーホルスターからベレッタを抜いた。

セグウェイとの距離は、およそ8m。

『喰らえ!』

少しだけ木陰から身を出して、セグウェイに向かって残弾が無くなるまで発砲した。

あまり良い射撃体勢ではなかったが、綺麗に全弾命中し、2台は壊れていた。

『一つ残ったか……』

ベレッタのマガジンを代えて、俺はまた木から身を出して最後のセグウェイに数発発砲した。

撃った弾の内一発がUZIに当たり、セグウェイは行動不能になった。

『無駄に手間掛けさせやがって……』

セグウェイの破壊を確認し、直ぐに体育倉庫に向かった。ちょうどその時、体育倉庫の方から少年が一人出てきた。

『なっ……!!』

その少年の顔を見て、俺は目を丸くしたまま固まった。

その少年のことを、俺は知っていた。

『キンジ……』

その少年――遠山 キンジ（とおやま きんじ）は、俺の従兄だからだ

ブローグ〜再会〜（後書き）

中途半端な終わり方をしてしまいましたw w
とりあえず次はもう少ししっかり書きたいと思います。

第1話〜遠山キンジと神埼・H・アリア〜（前書き）

1日1話ペースで書くつもりでしたが、予想以上にキツイです

第1話〜遠山キンジと神埼・H・アリア〜

それなりに離れていたもので、キンジは俺に気づくこともなく去っていった。

『って事は自転車に乗ってたのはキンジだったのか……。だが何故パラグライダーの子に追われてたんだ？』

追いかけてようか考えたが、そこであることを思い出した

『そうだ！さっきのセグウェイ！！』

俺は今さっきキンジが出てきた体育倉庫へと走った。

この時に体育倉庫に行ってしまったことを、後に後悔することになるとは知らずに。

体育倉庫のすぐ近くまで来た俺は、言葉を失った。

体育倉庫の前には、セグウェイに取り付けられていたUZIが大破——恐らく銃口に弾丸を入れて壊した——していた。

『これは……キンジがやったのか……？それとも……あいつか？』

「アイツ！今度会ったら絶対風穴開けてやる……！！」

俺の目線の先には、小太刀を振り回しながらワッキャー叫んでいる少女がいた。

小学生くらいの身長に、武偵高のセーラー服を着ている。

特徴的なのは、膝のあたりまである長いピンクのツインテールだ。しかし……。

『何というアニメ声！……って今はそんなこと言ってる場合じゃねえな。』

エクスキュー……じゃなくてすみません』

英語を話しそうになりながらも、転校初日から悪い印象を持たれまいと丁寧な少女に声をかけた。

「ひゃうっ!!」

いきなり話しかけられてびっくりしたのか、少女はバツと振り返って俺を見た。

「驚かせちゃった？それはスイマセン。ところでいきなりだけど、見いつけた!!」・・・へ?」

話している途中でいきなり指を指されて、俺は間の抜けた声を出した。

「さつきはよくもやってくれたわねこの強狼男!!」

少女は独特な地団駄を踏みながら怒鳴りつけてくる。

「強狼?何のことですか?」

「とぼけてるんじゃないわよ!!」

少女はそう言うと、物凄いスピードで小太刀で斬りかかってきた。

「ぬおっ!!」

全力で横に跳んで、ギリギリで小太刀をかわす。

「ええいちよこまかと!!」

少女は直ぐに方向転換して、再度俺に斬りかかってきた。

流石に連続でよけるのは無理だと判断し、ショルダーホルスターに銃と一緒に付けてあるコンバットナイフを2本取り出し、切り結ぶ勢いは少女の方が上だが、頭に血が上っていて力にムラがあったため腕力だけで押し切ることができた。

もはやこの様子では事情を聞くのは不可能に等しい。

俺はこっそり隠し持っていたスタングレネードーちなみにこれは閃光だけのタイプだーを後ろ手で準備する。

「てことで三十六計逃げるに如かず!!」

少女と俺との間にスタングレネードを投げて、全速力で後ろを向いて走り出した。

少女は、投げられたものがスタングレネードだと直ぐに理解し、腕で目を隠していた。

スタングレネードが爆発し、辺りは一瞬光に包まれた。

俺は少女が動き出す前になんとかその場を離脱し、俺は教務科マスターズに向

かった。

『まさかいきなり襲われるとはな……しかも強猿男とか言われたし……』

俺は教務科で先生に指示された教室（ちなみに2・Aである）の前で、中で軽く挨拶をしている担任の高天原ゆとり先生を待っていた。

『わざわざ外で一旦待たせてから呼ばなくても、最初っから中に入れてくれればいいのにな』

そんな感じで愚痴つてると、教室の中からこんな声が聞こえてきた。「私からの挨拶が終わったところで、スペシャルゲストの転入生を紹介しまーす

ニューヨーク武偵高から来た、カッコイイ帰国子女ですよー」

先生、なんで紹介する前からそんなにハードルあげるんですか……そんな俺の心の声もつゆ知らず、先生が「それでは入ってきてください」と呼んできた。

まあそれはそれとして置いて、やはり第一印象は大事だ。キツイ顔になっていないか確認し、俺は教室の扉を開いて中に入った。

瞬間、教室中の女子生徒は「キャー!!!」という悲鳴なのか何なのかよく分からない声を上げた。

良く知り合いに「顔立ちがいい」とか「イケメン」とか言われるが、こんな悲鳴を上げられるほどのものだったとは思わなかったな。

教壇のところまで行き、先生に軽く頭を下げてからチヨークを手に取り、黒板に漢字で名前を書いてーちなみに字はかなり綺麗ー皆の方に向き直った。

クラスの皆をざっと見渡すと、そこにはキンジの姿があった。

『先生の紹介にあつたとおり、ニューヨーク武偵高から来た毒島金助です。よろしくおねがいます』

丁寧に自己紹介をし、最後に軽い営業スマイル(?)をした。するとまた女子生徒達が「キャー!!!」と声を上げた。

若干引き気味の先生に促されて、キンジの真後ろの空席に座った。

「凄い人気だな、お前。俺は遠山キンジだ。」

座るなり、後ろを向いてキンジが話しかけてきた。

「どうやら俺のことを忘れたらしい。」

俺は、キンジの顔を笑顔でジーっと見つめる。

「どうした？顔になんか付いてたか？」

キンジは両手で顔を探った。

もちろん何も付いていない。

「何だ、忘れられちゃまってたか？」

「忘れる？何のことだ？」

「本当に覚えてないのか・・・まあしょうがないか。最後に会ったのだから5歳くらいだったもんな・・・」

「お前は何を言ってるんだ？」

少し感傷にひたっていた俺に、キンジはさっきとほとんど意味が変わらない質問を投げつけてきた。

「俺だよ俺。従兄の金助だよ」

「・・・!!!」

キンジは口をあんぐり開いたまま固まった。

「思い出してくれたか？キンジ」

「・・・そうか、金助だったのか」

「積もる話もあるだろうが、それは後でな？」

俺は目でキンジに前を向くよう促した。

キンジは何か言いたそうな顔をしていたが、渋々前に向き直った。

キンジが前を向くとほぼ同時、教室前方の席の女子生徒が、立ち上がった。

自己紹介でもやらせるのかなーと俺は呑気な事を考えていたが、よく見ると立ち上がった女子生徒はさっき一戦交えたあの少女だった。「死角で見えんかった・・・」

目の前ではキンジが机に突っ伏してた。
体育倉庫で二人に何かあったということは、キンジのリアクションを見れば一目瞭然だった。

朝はいきなり襲われて名札―武偵高では、4月に全員が名札を付けるルールがある―を確認し損ねたが、今は見える。

『・・・神崎・H・アリア？』

女子生徒の胸に付いた名札の名前を読み上げる。

その時、神崎は教壇の横からキンジを指さしてこう言った。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

俺以外のクラスの生徒、絶句。

そして数秒沈黙が続いた後に、クラス中に歓声が起こった。

キンジを見ると、椅子からずり落ちていた。

「よ・・・良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！

先生！オレ、神崎さんと席変わりますよ！」

するとキンジの真右に座っていたツンツン頭の男子生徒が立ち上がるなりキンジの手を振りながら満面の笑みでそう言った。

てかでかいなコイツ。185センチある俺よりもでかいぞ。

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤君、席を代わってあげて。」

先生がうれしそうにキンジと神崎を交互に見ながら言った

一旦ここまでの流れを整理しよう。

・朝、二人は爆弾事件に巻き込まれて、体育倉庫で何らかの接触をし、恐らくキンジが何か神崎を怒らせるようなことをした。

・俺のクラスは、キンジと神崎が一緒だった。

・神崎が突然キンジの隣に座りたいと言い、武藤というキンジの友人らしき生徒が何やら勘違いをして、うれしそうにキンジの隣の席を譲った。

駄目だ、全く状況が掴めない・・・

ふと周りを見ると、金髪の神崎と同レベルの小ささの理子という女

生徒が「フラグがバツキバキ」だの「熱い恋愛の真っ最中」とかよくわかんないことを言いながら机に突っ伏して落胆しているキンジの机のまわりをよく分からないステップを踏みながら回っていた。周りの生徒は、なんだかキンジにあらゆる罵声を浴びせていた。

ズガガン！！

そんな若干シュールな光景を眺めていると、突然二連発の銃声が鳴り響いた。

よくわかんないけど、今のやり取りで何故か顔を真っ赤にした神崎が2丁の大型拳銃のガバメント（M1911）をぶっ放したらしい。「れ、恋愛なんて……くっつたらない！」

チン、チンチンチン……

銃から排出された2つの葉きょうが落ちる音が響いた。

良く分からない舞を踊っていた理子は、ロボットのようなカチカチした動きで自分の席に早急に戻った。

いくら校内での発砲が許可されているとはいえ、このタイミングでいきなり銃をぶっ放されたら俺のような軍人ほど発砲に慣れていなければ、そりゃあビビるだろう。

「全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言うヤツには……」

これが、神崎・H・アリアの皆に向けた唯一の自己紹介だった。

「風穴あけるわよ！！」

2-Aの教室に、天井に向けて放たれた、乾いた銃声が響いた。

第1話〜遠山キンジと神埼・H・アリア〜（後書き）

擬音が何気に難しいです

第2話　ランク決めと奴隷宣言（前書き）

激しい腹痛の中書いたため、文章が変かもしれません

第2話〜ランク決めと奴隷宣言

昼休みになるやいなや俺は質問攻めにあっていた。

クラスの連中どころか、噂を聞きつけた他のクラスから来た奴らも交じって、教室は飽和状態だ。

そんな状況だが、悪い印象を持たれないためにもきちんと質問―一度だけ何故かスリーサイズを聞かれた―に答えなければいけない、神崎関連で俺のように質問攻めにあいそうになって逃げた従兄をこの時は恨めしく思った。

「前の学校では専門科は何だったの？あとここではどこに入る予定なの？」

ふと、そんな質問をされた。

やっとまともな質問が出てきたな・・・

『ニューヨーク武偵高ではレサート諜報科で、Sランクだったよ。ここではアサルト強襲科に入るつもりなんだ』

そう回答したところSランクのところで歓声上がり、強襲科以外の生徒からは

「強襲科なんて物騒なところ止めて探偵科インクスタにおいでよー!!」

「Sランクなのに科を変えるなんてもつたないよ！諜報科にしな

よー」

「いや、車輛科ロソクにすれよー」

「衛生科メディカにするべきよー」

「情報科インフォルマだー」

といった感じの意見―願望が出てきた。

ここは理由を話すしかないな。

『あゝ、悪いけど強襲科になるのは決定事項なんだ。俺は武偵であると同時に、米陸軍の特殊部隊デルタフォースに所属していて、そ

この司令官でもある父の命令で強襲技術を磨かないといけないんだ。

俺は強襲科を選ぶ理由をきちんと説明し、その場の争いを収めた。

「……え？」

周りの皆が唾然としている中、一人の男子生徒がこう聞いてきた。

「デルタフォースって、あのデルタフォース！？確かデルタフォースの入隊できる最低の階級が2等軍曹だったよね？……失礼かもしれないけど、毒島君の階級は？」

詳しいものだ、と感心しながら俺は質問にこう答えた。

『少佐だよ』

2-A教室に、荒っぽい武偵高ではかなり珍しい長時間の沈黙が流れた。

放課後、俺は強襲科を担当している蘭豹ランヒョウに呼び出され、廃ビルワセビルの前に来ていた。

なんでもランクを決める為にテストをするらしい。

アメリカから来たばかりでしっかりした武装をそろえられていないので、テンションはかなり低い。

今持ってきているベレッタM92Fだって、軍から支給されたもので元は俺の銃ではない。

それにナイフも急いで購入した安物だ。

唯一の救いは自作して作ったスタングレネードだな。あくまでも自作の域を超えないけど。

自分の装備に肩を落としていると、後ろから声がかげられた。

『蘭豹先生。』

「来たか毒島。キチンと武装してきたな？」

振り返ると、立っていたのは蘭豹だった。

男物っぽいTシャツとカットジーンズを着ており、背中には2mはあるであろう長刀を背負っていて、何より腰までかくて長いポニーテールが特徴的だ。

かなりの美人なのだが、凶暴な性格にバカみたいな怪力の持ち主の為雌ゴリラと呼ばれている。キーキンジ情報。ーらしい。

『はい先生。』

無論、嘘だ。

「よし、それじゃテストの詳細を説明するで。お前にゃは武装した強襲科のガキ共と一緒にこの廃ビルに入って、他の奴を相手に捕縛しあってもらう。以上や。何か質問はあるか？」

ずいぶん短い説明だなと思いつつ、ありませんと返事をする。

「じゃあ中に入れ。サイレンが鳴ったらスタートや。」

そう言つて、蘭豹はビルの横にある小さな建物に入つて行った。

『さーて、がんばりますか。』

俺は廃ビルの戸に手をかけ、開けた。

中はそれなりに広く、遮蔽物は正方形の柱がいくつかあるだけだった。

周りの状況を確認していると、サイレンが鳴った。

俺は、1階に誰もいないことを確認してから2階へ続く階段を登った。

普通の人は、隠れながら慎重に進むだろう。

だが、俺は違う。

諜報専門の兵士になるために物心がつく前から父にハードな訓練をやらされていて、そのおかげで俺は人の気配を察知する能力が異常に高いのだ。

よつて、俺に対して学生の武偵レベルの待ち伏せは意味を成ささるのである。

階段を登っている途中で、2階に何人かの隠れている気配を感じた。どうやら他の生徒達は、手を組んで一気に多人数で攻めて終わらせる作戦らしいな。

『だが甘い。』

俺は脇のホルスターからベレッタを抜いて階段を駆け上がり、直ぐ近くの柱の陰からナイフを持って飛び出してきた男子生徒の足に弾

を当てて体制を崩し、一気に距離を詰めて首の後ろに手刀を喰らわせて気絶させた。

次に俺はナイフを左手で取り出して、右の瓦礫から出てきたナイフを持った男子生徒と拳銃を構えた女子生徒に向かつて構える。

銃の射線から逃れるために、突っ込んでくる男子生徒の陰に隠れた。斬りかかろうとナイフを少し振りかぶった男子生徒にかなり至近距離まで肉薄してナイフを封じ、右肘を鳩尾に入れる。

そして気絶した男子生徒を盾にして、発砲しかねている女子生徒の脇腹に発砲して狙いを外させてから接近し、ナイフを突き付けて反抗できなくさせた。

『チヨロいな』

俺は生徒達を縄で柱に巻きつけ、3階に向かった。

3階を制圧した俺は、結構時間はかかったがその勢いのまま全ての階の生徒を倒し、捕縛した。

残りが居ないのを確認して、ビルを出た。

余談だが、3人ほど抜き打ちで教官が居たのだが、勝てないと判断してウマ〜くやり過ごして放置した。

ビルを出ると、蘭豹が俺を待っていた。

「なかなかやるやないかい。時間がかかったとはいえ、まさか全員を捕えるとわ思わなかったで。」

『お褒めの言葉、ありがとうございます。』

蘭豹の褒め言葉に、軽く礼をしながら答える。

「ところで偶然遭遇しなかったのかは知らんが、中に教官3人を抜き打ちで隠れさせていたんだが気づいとったか？」

『いえ、それは気づきませんでした。』

気づいてたのに無視して戻って来たとは知られたら何を言われるか分からなかったので、嘘の返答をする。

「そうか。まあそんなことはええわ。とりあえず結果を言うで。」

毒島、お前はAランクや。」

Aランクか、まああのモード>を使わなかったのだから妥当な結果だろう。

結果にある程度満足した俺は、蘭豹に一礼してその場を去った。

俺は第三男子寮のキンジの部屋の前に立っていた。

高天原先生にこの部屋を使うように指示をされたからである。

『教務科には従兄だつてこと教えてないのにな。』

とりあえず中に入るためにインターホンを押した。

中からドタドタと足音が聞こえて、直ぐにドアは開かれた。

「どちら様・・・つて金助？どうしてここに？」

中からドアの隙間からキンジが顔を出した(当たり前だ)。

『他に空き部屋が無いらしくてね、ここを使えって先生が。入って良いか？』

事情を説明し、俺は部屋の中に入った。

すると、中には何故か朝襲ってきた神崎・H・アリアがいた。

『ゲ、神崎・・・!』

朝のことを思い出し、露骨に嫌な声を出してしまった。

「アリアで良いわよ。それとゲ、ってなによ。あたしが何かしたかしら？」

コイツ、どうやら朝の出来事を忘れてやがるな。

若干イラツとした俺は朝襲われたことを、嫌みたらしく説明してやった。

『・・・てことでお前はキンジと俺を間違えて襲つたつてこと？』

アリアが言うには、興奮していたアリアは、一旦どこかへ行ったキンジが戻って来たと勘違いして襲ってしまったらしい。

ていうかキンジはアリアに何をしたんだらう・・・。

キンジの方を見ると、少し顔をうつむかせた。

そうか、あのモードか・・・

「そうよ。悪かったわね。・・・てことはあの時に逃げたのはキン

ジだけじゃなくてコイツも・・・キンジだけのつもりだったけど、
決めたわ。」

アリアは少しためてから、こう言った。

「キンジ、金助。アンタ達、あたしのドレイになりなさい！」
俺とキンジの中から魂が抜けていくのが分かった。

第2話、ランク決めと奴隷宣言、(後書き)

蘭豹の関西弁が微妙でまとまらないですww

第3話 仮面の男と神殺し (前書き)

今回は長めです。

第3話〜仮面の男と神殺し〜

まさかの奴隷になれ宣言のあと、何故かある女物のトランクを部屋の隅にどけて、アリアの要望―実際は命令に近い―で3人でインスタントコーヒーを飲んでいた。

このコーヒーなかなかいけるな。とか考えている俺の横で、アリアは出されたインスタントコーヒーを不思議そうな目で見ている。

「これホントにコーヒー？」

どうやらアリアはインスタントコーヒーを知らないらしい。

「それしかないんだから有り難く飲めよ」とキンジ。

「・・・ヘンな味。ギリシャコーヒーにちよつと似てる・・・んーでも違う」

毒味をするようにインスタントコーヒーを飲んでアリアはそう言った。

なんて贅沢な奴だ。一回アリアには我がデルタフォース名物のコーヒー 別名：黒い水 を飲ませなければいけないようだな。あれほど不味いコーヒーは世界中探してもなかなか無いだろうからな。

「味なんかどうでもいいだろ。それよりだ」

キンジは一度区切ってコーヒーをすすり、テーブルの椅子に腰をかけて続ける。

「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその・・・お前を怒らすような事を言ってしまったことは謝る。

でも、だからってなんでここに押し掛けてくる」

そう口をへの字に曲げながらキンジが言うと、アリアはカップを持ったまま、きろ、と紅い目だけを動かしてキンジを見て、口を開く。「分かんないの？」

「分かるかよ」

「あんたならとづくに分かつてると思つたのに。んー……でも、そのうち思い当たるでしょ。まあいいわ」

いや曖昧過ぎだろアリアさん。

ズズズ……コーヒーウマウマ。

「ねえ、おなかすいた」

アリアは話題を変えつつ、ソファの手すりに身体をしなだれかけさせた。

コイツっていきなり女っぱい仕草をするんだな。

キンジは顔逸らしてるし。

ていうか俺も腹が減ってきたな。

「なんか食べ物ないの？」

「ねーよ」

『え？無いの？』

「ないわけないでしょ。あんた普段なに食べてんのよ」

「食いものはいつも下のコンビニで買ってる」

「コンビニに？ ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ行きましょう」

「じゃあつて何でじゃあなんだよ」

「バカね。食べ物を買うに行くのよ。もう夕食の時間でしょ？」

おお、これがズレ漫才というやつか。言葉のキャッチボールが成立していないぞ。

ていうかアリア、ここで夕食食つてくつもりなのかよ。

キンジが頭痛っぽいなかで頭を押さえていると、アリアはバネでも付いてるかのようになり、ぴょーん！とソファからジャンプして立ち上がり、キンジにとこと近づいて上目使いでキンジを見上げる。うわ、やっぱりちっさいな！。

「ねえ、そこって松本屋の『もまん』って売ってる？ あたし、食べたいな」

ということでも3人でコンビニに行くことになった。

ももまんとは、一昔前にちよつと流行った桃の形をしただけのごく普通のおまんらしい。

それをアリアはなんと7個も買ったのだ。

全部食べるわけないよな、と思っていたが、もうすでに5個平らげている。

ちなみにキンジはハンバーグ弁当、俺は材料を買ってきて台所で炒飯を作っている。

やっぱり料理が出来るってのは良いよな。

皿に乗せてリビングに行く、キンジはさっきの奴隷宣言の意図を確かめていた。

「ドレイってどういう意味だ？」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をします。もちろん金助もね」

アリアはももまんをほおびりながらモゴモゴと説明をする。

てかドレイってそういう事かよ。

『強制ですか……』

「何言ってるんだ。俺は強襲科がイヤで、武偵高で一番マトモな探偵科に転科したんだぞ。」

それにこの学校からも、一般の高校に転校しようと思ってる。武偵自体、やめるつもりなんだよ。

それを、よりによってあんなトチ狂った所に戻るなんてーームリだ」

俺はキンジの横に座りながら話を聞く。

ていうかキンジが転校するつもりだっていうのは知らなかった。

昔は金一さんみたいに立派な武偵になるってはりきってたのにな……。

まあその目標だった金一さんが亡くなったんだから、分からない話でもない。

初代・かの有名な名奉行、遠山の金さんから続く遠山家の人間は先祖代々正義の味方をしていた。

時代によりその職業は違ったが、遠山家の人間はヒステリア・サブアン・シンドローム（HSS）ー俺とキンジはヒステリアモードと呼んでいるーという神経性の特殊な遺伝能力を持っていて、恋愛時脳内物質が一定以上分泌されるとそれが常人の30倍もの量の神経伝達物質をつを媒介して、大脳・小脳・脊髄などの中枢神経の活動を劇的に亢進させ、論理的思考力・判断力・更には反射神経もが飛躍的に上昇し、一時的に人が変わったようなスーパーモードになったー当然キンジや俺にも遺伝しているーのだ。

ちなみに恋愛時脳内物質の分泌を、一言で言えば「性的に興奮すること」であるー俺は例外だがー。

キンジの兄の遠山金一はヒステリアモードを完全に操る非常に優れた武偵でとにかく強く、正しく、そして誰よりもやさしい人だった。味方が敵に囲まれて他の仲間から見捨てられた時も、金一さんは見捨てずに無傷で助け出したという話もあるほどだ。

だが、金一さんは去年のクリスマスに浦賀沖で海難事故に遭い、乗客を全員避難させたがそのせいで逃げ遅れた金一さんは帰らぬ人となった。

搜索しても死体は見つからず、それどころか乗客たちからの訴訟を恐れたクルージングイベント会社、そしてそれに焚きつけられた一部の乗客たちは、事故の後金一さんを激しく避難した。

曰く、「船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかった無能な武偵」と。

ネットや週刊誌、それにテレビなどのあらゆるメディアで避難され、遺族であるキンジに罵詈雑言を吐き、更に謝罪しろとまで言ったのだ。

俺は情報操作でキンジとの繋がりを隠ぺいしていたので何もなかったが、そのニュースを見ているだけで胸が痛んだ。

金一さんは人を助けて犠牲になり、スケープゴートにさせられた。

キンジは、この事件の原因を「武偵なんかをやっていたから」とし、金一さんが武偵になる要因――兄を破滅への道へ追いやることとなったヒステリアモードになることを嫌になった、と聞いた。

キンジが武偵をやめると言っても無理はない。

だがそれに対しアリアは、

「あたしがキラいな言葉が3つあるわ」

と聞いていない。

何だよ感傷にひたつてた俺がバカみたいじゃねえか。

キンジも同じ考えらしく、

「聞けよ人の話を」

と反論する。

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押しとどめる良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね？」

そう言つてアリアは7つ目のももまんを平らげた。

「キンジのポジションは　　そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ。金助はまだ実力が良く分かってないから保留ね」

『保留つて扱い酷くない？』

ちなみにフロントとは、フロントマン、武偵がパーティーを組んで布陣する際の前衛の事である。

最前線で戦うため、負傷率ダントツの危険なポジションである。

「よくない。そもそもなんで俺なんだ？」

とキンジが理由を聞こうとすると。

「太陽は何で登る？月はなぜ輝く？」

『いや話跳び過ぎだろ・・・』

そんな俺の言葉もむなしくアリアは続ける。

「キンジは質問ばかりで子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」

イヤお前にだけは言われたくねえよ。

と言いつつになつたが、逆鱗に触れそうだったのでこらえる。

『(キンジ!)』

俺は小声でキンジに話しかける。

「(ああ、分かっている。こいつとは、会話のキャッチボールが成り立たない。対抗するにはこちらも自分の要求を単刀直入にたたきつけるしかない。そうだろ?)」

『(その通りだ。てことで行け)』

アリアの死角でキンジに親指を立てた右手を出す。

キンジはそれにうなずいたあと、アリアに向かって斬りこんだ。

「とにかく帰ってくれ。俺は金助と話したいことがあるんだ。帰れよ」

これはなかなか良かったんじゃないだろうか。と思つてた矢先、アリアはこう答えた。

「まあ、そのうちね」

俺は椅子からズルツと滑り落ちた。

「そのうちっていつだよ」

「あんた達が強襲科であたしのパーティーに入るって言つまで」

『(頑固だな・・・!)だがもう夜だぞ?』

「なにがなんでも入ってもらわうわ。私には時間が無いの。うんと言わないなら・・・」

アリアはそこで言葉を止める。

「いわねーよ。なら? どうするつもりだ? やってみろ」

キンジが毅然とした態度で断ると、アリアはその大きな眼でキンジをにらみ、こう言った。

「言わないなら、泊ってくから」

『「・・・はあ!?!」』

俺とキンジの顔が、痙攣を起したように引きつる。

「ちょ・・・ちょっと待て! 何言つてんだ! 絶対ダメだ! 帰れ!」
キンジが慌てて止めに入る。

当然だろうな、ヒステリアモードになる要因を泊めるなんてことキンジが許すはずがない。

「うるさい！泊ってくつたら泊ってく！！長期戦になる事態も想定済みよ！」

と言ってアリアは部屋の隅に置いてあるトランクを指さした。

『「あれ宿泊セットかよ！！」』

キンジとシンクロツツコミをしたところで、アリアが突然態度を変えた。

「 出てけ！！！」

『いや何で！？それはこっちのセリフだぞ！？』

「な、何で俺らが出ていかなきゃいけないんだよ！ここはお前の部屋か！」

「分らず屋にはおしおきよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！」

子供みたいに両こぶしを振り上げ、アリアは俺たちにネコのような犬歯を剥くのだった。

『追い出されちまったな・・・』

「そうだな・・・しかも中から鍵かけられてるし・・・」

俺とキンジは、部屋の前で肩を落としていた。

『せつかくゆつくり話でもしようとしてたのにな・・・まあまた今度の機会にするか』

「だな。で、この後どうする？俺はコンビニで時間つぶすけど」

『ん・・・俺は少し散歩してくるかな？』

キンジの問いに、少し考えてから答えた。

「そうか。学園島の中は多分安全だろうけど一応気をつけるよ。」
キンジはそう言い残して下に降りて行った。

『俺も行くか』

俺もキンジの後を追うように下に降りた。

『夜中の一人散歩なんて久しぶりだな・・・普段は基地の中で訓練ばかりしてたし、外にいても基本的に誰か付いてきてたしな』

散歩に出たは良いが、行くところを思いつかなかったためとりあえず海岸沿いに歩くことにした。

潮風が気持ちいい。

『てか東京湾ってどんな魚居るんだろうな・・・潜って取りに行こうかな?』

などということの本気で考えていたら、いきなり自分の真上に殺気を感じたのでバックステップで下がる。

俺がバックステップをした直後、元々俺が居た場所に刀が突き刺さった。

上を見ると、電柱の上にトレンチコートみたいな服を着ていて、能などでよく見かけるような面を付けた男が立っていた。

若い感じがするが、それでいて熟練した武人のような重い威圧感を放っている。

『いきなり襲ってくるとは・・・何者だ?』

右手でベレッタを抜きながら、俺は仮面の男に声をかけた。

「フッフ、そう身構えるんじゃない。君とは戦うつもりはない。」

ハッキリと丁寧な中に、子供のような無邪気さを兼ね備えたような声で男は返してくる。

『何者だと聞いている。答える』

俺はベレッタを仮面の男に向けた。

「戦うつもりはないと言っただろう?それとも君は僕との死合いを望むのかな?」

気がつくとも仮面の男は俺の目の前に立っっていて、ベレッタを持つ右手を掴んで動けなくさせられていた。

速い・・・!!ヒステリアモードじゃなかったのを差し引いても、速い。

動きが待ったく見えなかった。

仕方なく俺は空いている左手を上げて降参の意を示す。

仮面の男は俺が降参したのを確認して仮面で隠れてるので良く見えないが、手離してから手を離れた。

「ではまず私が名乗ろうか。私は鎌。君に渡すものがあつて来た。」
鎌と名乗る男は、背中に背負っていた細長い袋に入った何かを俺に差し出してきた。

『これは・・・？』

「星伽・毒島から預かりし神器が一つ。神殺し、受け取るがいい」
毒島のところで若干ビクツと反応しつつも、言われるままに細長い袋を受け取ると、ずっしりとした重みが伝わってくる。

『・・・刀か』

袋の中身を取り出すと、平均的なものよりも若干長めの日本刀が入っていた。

「先に言っておくが、その刀は普通の刀ではない。その名の通り、神を斬る為に作られた刀だ。

そして、君はこの刀を用いてあるものを守らなくてはいけない。これはもう、逃れられない運命だ」

『何でそんな代物を俺に渡すんだ？』

どれだけ考えても、何故俺なのかが分からない。

だが、男から帰って来た答えは予想以上の物だった。

「君が森羅蒼天流の後継者だからさ。それが一番の理由だ。」

森羅蒼天流とは、昔から毒島家につたわる秘剣で、その技は全て必殺の剣になり得る程の剣術である。

俺は、森羅蒼天流を母から直接受け継いでいる。

それを知っているのは毒島と深い関わりを持つ遠山家の一部の物が、こちらも同様深い関わりを持つ星伽の人間の可能性が高い。

それ程の機密情報を、こいつは知っている。

それどころか、俺に関する情報はほとんど筒抜けと考えても良いだろう。

「納得がいつてないみたいだね。まあ当然か。その刀の事は、星伽の人間から聞けばいい。

ということ、僕は帰らせてもらうよ。君とはまた遠くない未来に会う、そんな気がする。

その時に、また会おう。」

そう言つて男は姿を一瞬で消した。

さっきは心地よく感じた潮風は、今となつては冷たく吹き付ける、不愉快な風になっていた。

第3話〜仮面の男と神殺し〜（後書き）

後半の文章が自分でも良くわかんなくなってしまうましたww
以後、気をつけます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1430y/>

緋弾のアリア～神殺し伝説～

2011年11月5日02時06分発行